



TITLE:

diverttishmentを超えるもの: パスカルの概念を手がかりとして

AUTHOR(S):

大町, 公

CITATION:

大町, 公. diverttishmentを超えるもの: パスカルの概念を手がかりとして. 実践哲学研究 1978, 1: 43-54

ISSUE DATE:

1978

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/59113>

RIGHT:

divertissement を超えるもの

—パスカルの概念を手がかりとして—

大 町 公

1

17世紀フランスの思想家ブレーズ・パスカルはその『パンセ』第8章（ラフェマ版による。以下同じ）において人々の日常生活を取り上げ、そこにおける諸々の活動をすべて *divertissement* の一語でもって言い表している。パスカルからすれば、現世において人間の行いうるあらゆる行為は *divertissement* なのである。

それでは具体的にパスカルの目に写った、人々の生活ぶりとはどのようなものであったのだろうか。

人々は様々な職業に従事している。かたわら他の人達との交際を、婦人達との会話を求めている。賭け事や芝居見物、狩りやダンスに興じている。いつか顯職に付けることを夢見ている。まだある。時には航海に出かけたり、高いお金を出して軍職を買い、砦の攻略に加わったりしている。絶えず自分を引きつけ魅了する対象を求めているのである。とにかくじっとしてはいない。騒ぎや動きを求めてやまないのである。人はなぜそうなのか。もしそうということがなければ、人々の身に起こる諸々の不幸もどれほどか減少することであろうのに。いったいどうしてなのか。

賭けや狩猟、ダンスにうつつを抜かすこと、あるいは地位や名誉を得ようとする。それらは所詮空しいことではないのだろうか。人間には他にもっとなすべきことがあるのではないだろうか。それなのに人々はなぜかかる事柄に我を忘れるのか。パスカルは考えた。そしておもむろにこうつぶやくのである。

人間のさまざまな不安動揺のすがた、宮廷や戦争において人間が危険や労苦に身をさらしている有様 — こういう所から、多くの争いごとや情念、大胆不敵な・往々悪意のある企てが生まれてくるものである、— それらを特に深く考察してみ、わたしはよく言ったものだ。およそ人間の不幸というものは、一つの部屋

の中に、じっと静かにとどまっていることができないという、ただ一つのことから起っているのだと。生活に困らないだけの財産のある人が、自分の家にじっととどまっていて、それで楽しかったら、何も家をはなれて、航海に出かけたり、とりでの攻略に加わったりしないであろう。自分の町から動かずにいるのが耐えられないからこそ、高いお金を出して、軍人の役職を買ったりするのだ。自分の家にじっとしているのが、楽しいところではないからこそ、人々との交際や、賭けごとの楽しみを求めるのだ。(136-139⁽¹⁾)

人間の不幸というものはただ一つのことから生じている。それは「一つの部屋の中に、じっと静かにとどまっていることができないという」ことである。「一つの部屋の中に、じっと静かにとどまってい」られるならば、人間にそのような不幸は起らないであろう。しかし人間にはそれができないのである。なぜであるのか。

しかし、もっと仔細に考えてみた時、つまり、わたしたちのすべての不幸の原因を見出したので、その理由を見つけ出そうとした時、わたしは、一つの非常に確かな理由があることに気づいたのだった。それは、わたしたちの人間の状態という、生まれながらのどうしようもない不幸の中にある理由であった。この弱く、死すべき人間の状態のことは、わたしたちが、そのことをつきつめて考えてみると、もう何ものによってもなぐさめられないほどに惨めであわれなものなのである。(同前)

人間のあらゆる不幸の「原因 (cause)」は、人間が「一つの部屋の中に、じっと静かにとどまっていることができないという」ことであつたが、そのような「原因」の困って来たる「理由 (raison)」がある。しかも「非常に確かな理由」である。それは「わたしたちの人間の状態」、「生まれながらのどうしようもない不幸」な「人間の状態」である。その「人間の状態」とは「弱く、死すべき人間の状態」であり、「つきつめて考えてみると、もう何ものによってもなぐさめられないほどに惨めであわれなもの」だからである。

「・・・こうした惨めさを見ながらも、人間は幸福になりたいと思う。幸福にな

りたいとのほかは何も思わない。また、そう思わずにはいられない」(133-169), とパスカルは言う。「生まれながらのどうしようもない不幸」という「人間の状態」と、「幸福になりたいと」「思わずにはいられない」願いと狭間で人間は考えたのである。自分自身のことを考えることから *détourner* すること, *divertir* すること, *divertissement* が生まれるのはかかる地点においてである。不幸な人間の状態を変えられるはずがなく、かつまた幸福になりたいとの願いが切なるものであるなら、不幸な状態から目をそむけるよう専心努力すること、それ以外いったい自らに何ができよう、と。「人間は、死も惨めさも無知も癒すことができなかったのも、幸福になるために、こういうことは考えずにいようと思いついたのだった」(134-168)。

2

divertissement —かつて三木清は『パスカルにおける人間の研究』においてこの語を「慰戯」と訳し、現在発行されている邦訳においても津田穰氏はこの訳語を継承している。他方松浪信三郎氏、前田陽一氏、由木康氏、田辺保氏はいずれも「氣ばらし」と訳している。拙論においては、日常的な語感という見地から、やはり「氣ばらし」の方を使わせていただくことにする。

さて、この世で最も幸せな境遇にある者としてたとえば国王を想定することができる。しかし、もし王に「氣ばらし」がなければ、王もまた自分自身のことを考えざるをえなくなる。起こるやもしれぬ反乱や、避けられぬ死や病気のことを考え、国王もたちまち沈んでしまうであろう。「氣ばらし」がなければたとえ王でさえ不幸になる。賭けに興じる最下級の部下よりもなお不幸になるのである。国王の幸せとは、なんとか国王の気を紛らそうと努める人達に取り巻かれているということに尽きる。

「氣ばらしなしには、よろこびがない。氣ばらしがあれば、悲しみがなく」(136-139)。幸せになるためにはたとえ誰であれ「氣ばらし」をする必要がある。自分自身について考えることから気をそらさなくてはならない。即ち、通例「娯楽」とも訳される *divertissement* の元の意味は、自分自身のことを考えることから気をそらせる、気を他に転じさせるということ、あるいは自分自身について考えること

より生じる気分を紛らせることに他ならないのである。

それでは具体的に「気ばらし」はどのようなものなのか。

人々は兎を求めて野山を駆け回る。貴族は狩猟を高尚な楽しみとさえ考えている。かれらは必ずしも兎が欲しいわけではない。兎を手にするに幸せがあるとも思っていない。兎ならやるからと言われてもかれらは断るであろう。兎が得られさえすればいいのではないのである。人々が求めているのはおだやかな手に入れ方ではない。そういう仕方なら依然として人々に、その惨めさを、死を、不幸な状態を忘れさせてくれはしない。それでは自らの注意を他に転じさせ、気を紛らせることができないのである。人々が求めているのは自分自身から気をそらせ、憂さを晴らしてくれるほど、それほどまでにのめり込み、熱中し、我を忘れることである。人は獲物よりも狩猟を好む。人は「物そのものを求めないで、物を求めることを求めている」(773-135)。「・・・一匹の兎は、わたしたちが死や惨めさを見ないですむようにはしてくれないであろう。だが、狩猟は、——わたしたちの目をそこからそらせ、——それらを見ないですむようにしてくれる」(136-139)からである。

人々は買ってなら欲しくない兎を終日追いかけて回して楽しんでいる。半可通の知識人はしたり顔でそれをあげつらう。そんなものを手に入れたところで満足できるわけがないと言い放つ。しかしかれら半端知識人こそかの人間の本性を知らないのである。人々は獲物よりもむしろ狩猟を好む。それは「民衆の健全な考え方」である。健全さのあらわれなのである。人間はこの世においては「気ばらし」によってしか幸福になりえない。現世において幸せになろうとすれば、人間は「気ばらし」に頼るしかない。人間はかくも悲惨であることをかれら半可通の知識人達は知らないのである。

3

狩猟、賭け、ダンス、玉突き、・・・、これらすべては人々が幸福になりたいばかりに考え出したものである。自らの不幸な状態を忘れるためにそれらに熱中している。もちろんかれらはそうと気づいていない。そうとは知らずに我を忘れているのである。

日々賭け事をやり退屈もせずに暮している人がいる。その人がもうけていた金をやるという条件で賭け事をやめさせようとするれば、その人を不幸にしてしまうであ

ろう。もうけが欲しいのではなく賭けの楽しみを求めているからだと言う人がいるかもしれない。それなら何も賭けずにやらせてみるがいい。その人は退屈してしまふであろう。目標はやはり必要なのである。何も賭けずにやる賭け事なら楽しくない。賭け事をせずに入金ならいらぬが、賭けでもうけることは楽しい。あるいは、何もせずに得られる兎なら欲しくはないが、狩猟は大きな喜びである。「氣ばらし」には明らかに「想像力」が関与している。

人間に「氣ばらし」が可能なのは、人間には「想像力 (imagination)」が備わっているからである。「想像力」を欠いた動物に「氣ばらし」など考えられない。パスカルは断章 44—82 でこの能力を分析している。

それによれば、「想像力」とは「誤りといつわりの女王」であるが、それはいつも人を欺くとは限っていない。それだけにいつそうやっかいな代物である。好んで理性を押さえつけ支配しようとし、人間の内に「第二の本性」を造り上げた。「想像力」は理性とは違った形で、当人に充実した完全な満足を与えることができる。人間とはまず「想像力」に揺り動かされることによって行動するものだと言ってよい。「想像力」はすべてをその思うがままに動かし、あげくの果てにそれ自身の美、正義、幸福まで作ってしまった。この「欺瞞的能力」は「まるで否応なくわたしたちを誤りに引き入れるために、ことさら与えられたものであるように見える」。

人間はこれまで数々の「氣ばらし」を発明し工夫してきた。自ら熱中し夢中になる理由を作り上げ、自らを欺くことによってそう思い込む。また思い込みうる。「想像力」のおかげである。そしてその理由に基き、目標に向かい、己れの欲望、怒り、恐れをかき立てるのである。

玉突き、ダンス、……。自分の不幸、悲しみは、そのような子供だましではとうてい慰められないと言う人達がいるかもしれない。しかし幸か不幸か「人間は、どんなに悲しみにみちている時でも、だれかがうまい具合に、氣ばらしに引き入れてくれたら、ほら、もうその間はこんなに幸福なのだ」(136—139)。人間とはそれほど空しいものなのである。

との対照において語られている。

その中でパスカルは言う。

・・・こんなにもはげしい願い（幸福になりたいとの願い — 引用者註）があるというのに、それを果たす力がないということは、わたしたちに一体どういうことを告げ知らせているのであろうか。それは、かつては人間にも真実の幸福があったが、今ではもううつろなそのしるしと痕跡だけしか残っていないということ、人間は手当たり次第に自分のまわりにあるもので、このうつろを満たそうとむだな努力をし、今あるものからは得られない救いを、今はないものから得ようと求めているが、どのようなものにも救いを与える力はないということ、そのわけは、この底なき深淵を満たすことができるものは、ただ無限の・不動の存在、すなわち神のほかには何もないからであるということではなかったであろうか。／ただ神のみが、人間にとって真の幸福である。（148—425）

人間はかつては真実幸福であった。しかし「神」から離反し、その本性が墮落して以来、内部に空洞が生じた。「人間は手当たり次第に自分のまわりにあるもので、このうつろを満たそうとむだな努力をし、今あるものからは得られない救いを、今はないものから得ようと求め」た。幸せになろうとして様々な「気ばらし」に走った。そうとは知らずに「神」の代用品を希求していたのである。「人間が神を捨ててからというものは、なんとまあ不思議なことであろう、自然の中で神のかわりになることができなかったものは、何一つないのだ。・・・何もかもが神のかわりになった。人間が真の幸福を失ってからというもの、何もかもが同じように、人間には幸福と見えるようになった」（同前）。しかし「どんなものにも救いを与える力はない」。「この底なき深淵を満たすことができるものは、ただ無限の・不動の存在、すなわち神のほかには何もない」。「ただ神のみが、人間にとって真の幸福」だからである。

しかし、人間が「神」を、「真の幸福」を求めるようになるためには、まず自身に目を向けなくてはならない。「人間の状態」を、「生まれながらのどうしようもない不幸」を、たとえそれが「つきつめて考えてみると、もう何ものによって

もなぐさめられないほどに惨めであわれなもの」であっても、見つめる必要がある。そして、「悲惨」と「偉大」という「矛盾」を、人間という謎を存分に味わわなくてはならないのである。自分自身に立ち返ること——まずそこからしか何事も始まらない。

だが、人々は自らの空洞をなんらかの目標を定めることにより、絶えず熱気で満たそうとしている。人間にとって「真の幸福」は「神」だけであるのに、「気ばらし」による束の間の幸せのみを追い求めている。

人間には自らの悲惨を意識することより生じる「ひそかな一つの本能」があり、この「本能」が人を「気ばらし」へと駆り立てているのであるが、人間には「もう一つのひそかな本能」がある。この「本能」は人間の、その本性が墮落する以前の偉大さのなごりであり、幸福は「安らぎ (repos)」の中にしかないことを教える。人間は騒ぎの渦中であってひそかに「安らぎ」を求めている。この仕事が終われば「安らぎ」が待っていてくれるだろうとはかない望みを抱いている。

しかしいざその仕事が終わってみれば、待っているのは「退屈」であり、「倦怠」である。「情熱もなく、仕事もなく、楽しみもなく、精神の集中もなく、完全な休息状態にあるほど、人間にとって耐えられないことはない」(622—131)。「気ばらし」が自己から目をそむけること、自己逃避に他ならぬ限り、目標の達成は幸福の終了を意味する。自己に戻って来ざるをえなくなる。「戦いほどおもしろいものはない。だが、勝利はそれほどでもない」(773—135)のである。勝利のあとには必ず「退屈」が待っている。人は再び「気ばらし」を求めるであろう。求めざるをえないだろう。そのようにして人生は過ぎ去るのである。

「わたしたちの惨めさをなぐさめてくれる唯一のものは、気ばらしである。ところが、これこそ、わたしたちの惨めさの中で最大のもののなのである。なぜなら、わたしたちに自分自身のことを考えないようにさせ、知らず知らずのうちにほろびにいたらせるものは、主としてこの気ばらしだからである」(414—171)。

5

人々が生きている様を眺めると、その行いのどれもこれも「気ばらし」の一語に尽きる。人々は生まれながらの悲惨な状態から目をそらしている。目をそらさんがためにそのような行為にいそしんでいるのである。「いろいろな仕事もあるものだ

が、それらを一々吟味しなくても、気ばらしの中に一切を含めればそれでよい」(478-137)。職業もまた当然これに入る。divertissement という観点からすれば、あらゆる職業も賭け、玉突き、狩猟、等々と毫も違わない。

それでは学問はどうであろう。世に学者と呼ばれる人達のふるまいはどのようなものであるのか。

パスカルの例を借りれば、自らの書齋に閉じこもり、未解決の代数の問題と必死になって取り組んでいる人達がいる。その成果によって学者仲間の称讃を得んがためである。また、自らの知っていることを懸命に書き綴っている人達もいる。己れをより賢くするのではなく、人々に誇示せんがためである。

それらの学問は「気ばらし」に入るであろう。仲間内から称讃されること、人々に誇示することが目標になっている。その目標に向かって没頭している。その点では他の「気ばらし」とどんな相違も認められないからである。

確かにそうであろう。学問と言えども「気ばらし」に他なるまい。パスカルの言葉を概ね肯いつつも、なお疑問は残る。「気ばらし」でない学問というものはありえないのだろうか。たとえば“Wissenschaft als Beruf”はどうなのか。「天職」, 「使命」, 「召命」, …, どう呼ぼうとかまわないが、そのようなものとしての学問はどうなのであろうか。

マックス・ウェーバーは『職業としての学問』の中で、学者になりたいのだからと相談に来る若き学徒に対しては、次のように応じることになっていると述べている。

・・・大学に奉職する者の生涯は、すっかり僥倖に支配されている。わかい学徒が大学に就職する相談にきて、責任をもってすすめることはまずできない。もしその人がユダヤ人であったら、われわれがその人にむかって「希望をいっさいおすてなさい」ということはもちろんである。またユダヤ人でなくとも「きみは凡庸な連中がつぎつぎに毎年のように、きみを追いこして昇進してゆくのみでも、腹もたてず氣もくさらせずに、いられると思いますか」と問いたしておかなくてはならない。そうすると、返事はいつもきまっている。「もちろんです、わたくしはただわたくしの『天職』に生きるのです」とこうこられるのである。

—だがすくなくともわたくしの経験では、心を傷つけられることなしによくそ

のような運命にたえることのできたのは、ごく少数のひとつだけであった⁽²⁾。

職業として学問を選ぶにあたっては、60年前のドイツの学生もまたきまって「わたくしはただわたくしの『天職 (Beruf)』に生きるのです」と述べたと言う。しかしかれら学生歩みも多く地位や名誉に左右されざるをえなかった。思い通りのものが得られずに「心を傷つけられ」、「そのような運命にたえること」ができなかったのである。「天職」に生きているはずのかれらも、地位や名誉への未練は断ち切れなかった。かかる時かれらの生き方もまた *divertissement* であり、「天職」なるものも「気ばらし」に必要な一目標にすぎなかったと断すべきであろうか。

「天職」に生きるという生き方も、もしそこにパスカル言う所の「想像力」が関与すれば「気ばらし」に変わりうる。「天職」でさえそこに向かって突進すべき赤い布に変貌しうるのである。

6

パスカルは対話形式をとった断章 132 - 170 の中で、「でも、気ばらしをして楽しめるというのも、幸福なことじゃないかね」と問わせたあと、他方に次のような返答をさせている。

いや、そうじゃない。気ばらしは、よそから、外部から来るものだからだ。つまり、気ばらしは他に依存するものだ。だから、いろんな出来事に会おうと、どうしても乱されがちになる。そのために、悩みも避けられないということになる。

それなら、単に「よそから、外部から来る」ことにより、あるいは単に「他に依存する」ことにより、「いろんな出来事に会」って「乱されがちに」ならぬものとはどのようなものがあるだろうか。

学問もまた「気ばらし」である。「天職」でさえ時にそう変わりうる。しかし「天職」とはそもそも何であったのか。どうあるはずのものであるのか。

キェルケゴールはその青年時代に、自らの生き方を探るべく『ギーレライエの手記』なるものを書いている。

それによれば、「私」はいま何をなすべきか決心がつかない。決心がつくために

は「私」は「私の使命」を知らねばならない。「使命 (Bestimmung)」とは「神」が「私にほんとに私が・・・なすべきことを欲したもう」ことであると同時に、「私にとって真理であるような真理」,「私がそのために生き、そして死にたいと思うようなイデー」である。そして人間は自らの「使命」を理解した時、「自己の歩みとそのたどりゆく道」を知ることができ、その時には「これまでよりいっそう深い意味で」「私」となり、「生活の意義と安息」を得るのである⁽³⁾。

またオルテガは『ガリレオをめぐる』の中で、自らの未来を予見させうるものとして「使命 (vocación)」に言及している。

彼によれば、人間はともすれば「あにもなれる、こうにもなれる」と思いがちである。しかし自己に深く沈潜するならば事情はおのずと変わってくる。その時己が「内部のいずことも知れぬ深みから発せられる不思議な声」が、人間に「ただひとつのもの、たったひとつのもの」になれと言う。ある特定の「生の計画」を選ぶと言うからである。この「不思議な声」こそが「使命」であり、それは人の「真正の存在」がいずれであるかを教えてくれるのである⁽⁴⁾。

オルテガはこの「内奥からの声」の背後に「神」を見ているかどうかははっきりとはわからない。しかしこの二人の偉人は共通したことを教えてくれているように思える。

人間には各々歩むべき一筋の道がある。通常それは「使命」という名で呼ばれている。その道が最終的にどこに至るかは目下の所わからない。だが、さしあたってどの方角をゆけばよいかは教えてくれる。自らの内奥に耳をすますなら、「神」が、「内奥からの声」がささやいてくれる。その道を行くか行かぬかは本人の決断一つだが、「使命」を生きたりとはかかるか細い道を歩み通すことである、と。

「使命」を生きたりとは、自己に沈潜することにより己れの「真正の存在」がいずれであるかを聞き取ることである。その「内奥からの声」に従うことである。地位や名誉、それに人々からの称讃など他に何ものをも目標とせず、ただ「使命」のみに従う時、その生き方はなおも「気ばらし」と呼ばれうる余地はあるだろうか。おそらく「使命」と「気ばらし」とでは、それを生きている当の人間の内面において著しい相違を示すにちがいない。

人々は幸せになるために、自分自身のことを考えないでおこうとした。騒ぎを求

め、自己からの絶えざる遁走を企てた。「気ばらし」である。人々は「気ばらし」において何ほどか幸せなのである。楽しいのである。しかし「使命」を生きる者の胸中にそのような幸福感は、たとえば賭けや狩猟といったものに我を忘れる時のあの幸福感はあるのかどうか。そもそも人は幸せになろうとして「使命」を生きることを選ぶのかどうか。筆者にはわからない。推測の域を出ないのである。しかしかのシモーヌ・ヴェイユは「召命か、幸福な生涯か、いずれを選ぶべきか」と『ノード』にしたためたと言う⁽⁵⁾。「召命」はやはり「幸福な生涯」を約束しないのか。あるいは、「幸福な生涯」と対照的に語られる「召命」を生きぬく果てには、真のとか最高のとかいった言葉が冠せられる幸福が待っているのだろうか。

自らの「使命」のみに従うこと。そこにおいて選ばれる職業はもはや「気ばらし」とは言えないのではないだろうか。先ほど引用したウェーバーの『職業としての学問』の中に、すぐれた学者とは「おのれをむなしゅうして自己の課題に心をうちこむ」人と言う⁽⁶⁾、とある。あるいはこれも、「使命」に従うことが、単に学問という領域にとどまらず「気ばらし」でないことを示す一証言となるかもしれない。

「気ばらし」でないものを探すあまり、「使命」、「天職」などという当節はやらない言葉を持ち出さざるをえなかったが、「使命」を生きるということが今日なお可能なのかどうかわからない。現在「使命」なる言葉が依然として意味を持っているのかも知らない。それでも、自らがなそうとしていることが *divertissement* にすぎないかどうか、やはり一度は考えておくべきことと思われ、ここに拙き筆を執った。

〔註〕

- (1) 前の数字はラフユマ版の、後の数字はブランシュヴィック版の番号を示す。田辺保氏訳。『パンセー — ルイ・ラフユマ版による — 』（新教出版社。1966年初版）。以下同じ。但し、136—139、478—137においては訳文の一部を変更させてもらった。
- (2) 出口勇蔵氏訳。『世界の大思想』第Ⅱ—7巻（河出書房。昭和43年初版）366頁。
- (3) 榊田啓三郎氏訳。『世界の名著』第40巻（中央公論社。昭和41年初版）20、22

頁。

- (4) アンセルモ・マタイス、佐々木孝両氏共訳。『ガリレオをめぐる』(法政大学出版局。1969年初版) 214—215頁。但し、訳文の一部を変更させてもらった。
- (5) 『奴隷の宗教 — シモーン・ヴェイユとキリスト教』(新教出版社。1970年初版), 田辺保氏著。24頁。
- (6) 370頁。

(おおまち いさお 京都大学文学部研修員)